

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 11 月 30 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	井上 漱太

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ポルトガル、ヴィアナドカステロ市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ポルトガルにおけるウマシンポジウムでの発表および野生ウマの調査
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 30 年 11 月 12 日 ~ 平成 30 年 11 月 19 日 (8 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
Lorenzo Almada, Viana do Castelo
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の渡航の目的は二つあった。一つ目はヴィアナドカステロ市で開催されたガラノシンポジウムに参加し、市民を対象に研究の進捗を報告すること。二つ目は Serra D' Arga にて野生ウマの状況を確認することだった。 シンポジウムはガラノと呼ばれるポルトガル北部に固有の品種をテーマとして開催されたものだった。研究者から観光業、乗馬クラブの人まで多様な層が集まり、ガラノについて終日議論をおこなった。私はこれまでの研究内容とこれからの方向性に関して手短かに話した。ほかの発表や質疑応答に関してはポルトガル語で行われたため、理解できる部分は少なかった。ただ、地元住民の関心が非常に高いということは実感できた。私たちのチームが活動を続けるために、ヴィアナドカステロ市を含めた地元住民のバックアップは必須であることから、こういったシンポジウムや活動に継続して参加し続けることは非常に大切だろう。 Serra D' Arga での野生ウマの調査にて、4 群を発見することができた。とはいっても、春には 20 群以上確認できるので、やはり少ない。多くの群れが春とは異なる場所で生活している可能性が高い。さらに、夏の間、人の手によるコントロールがかなりあったこと、オオカミによる捕食が多数確認されたことは耳にしていた。その結果、今回確認できた 4 群も群れの構成が大きく変わっていた。その構成の変化がまだ遷移途中なのか、安定的なものかどうかは判断できなかった。来春の状況が全く予想できないという点で、やや不安が残る結果となった。来春の本格的な調査が始まるまでに、何度か現地の情報を収集しなければならないと感じた。

6. その他 (特記事項など)
本出張をサポートいただきました PWS に感謝申し上げます。